

動物アラカルト

堀 藤吉郎

豪雨を止めた樹上の霊犬

朝見の浄水池のうえに、昔庄内道といわれる枝郷へ通ずる道があった。この上手の山を昔敵見山といい、この付近に五反田上畑という地名がある。

この地域は、大友の家臣の朝見万太郎景治の領地であったいわれ、この敵見山の頂上近くに、一昔前に枯れてしまったが天を摩する大松があった。この松を犬ほえ松といて木の側に石の祠があった。

宝龜二年五月二十三日、豪雨のために山崩れして谷を埋め、田畑や田島田井一帯の人家を押し流して、四十七人の民百姓を殺したという歴史をもっている。この時、朝廷は調・庸を免除して難民に恩賜金を下賜したことが続日本書紀にも載せられているが、勅使として下向した大臣吉備の真吉備の徳を偲んで、後世の人が敵見山を吉

備山と改めたと語り伝えられている。

この史実について、おもしろい伝説がある。

この敵見山の頂上に伊邪那岐・伊邪那美の二神が山の神として祀られ、この祠の下手に犬のほえ松という老犬木があった。

宝龜二年、大雨が降り続き、空は黒雲におおわれて篠を束ねたような豪雨となった。村人はこの世の終わりが来たのであろうと、途方に暮れていた。ところが、ある日の真夜中に山の神の下手にある大松の梢に大きな犬が登って、大雨の降る空を仰いで天地に響き渡る大声で三度鳴き続けた。村人は豪雨の闇夜にこの奇声を聞いてますます恐れおののいていた。

すると不思議に今まで降り注いでいた大雨が止み、夜が明けるとつれて青空があらわ、太陽の光さえさしてきた。大洪水もだんだんおさまり元の静かな村になった。人々はほっとして生き返った喜びに浸ったのである。

それから誰いうとなく、この大松の梢で吠えた犬は、敵見山の山の神が人々の難儀をご覧になって、一夜犬に化身なされて雨を止めたのであろうと言うようになり、

この大松を犬吠えの松と呼ぶようになった。この松は、大人四人が手をつないでやっと回ることが出来る位の大樹であったが、今は枯れてしまった。

猿のくれた美酒

万寿寺別院の左に大谷という深い溪谷がある。秋の紅葉のの頃には立派な溪谷美を見せるが、この谷と田の浦の村里に面白い猿の報恩伝説がある。

府内(大分)の場末の草深い里に細々と煙をたててその日暮らしの貧しい人が住んでいた。名を中尾乾通といた。正直一方の律義者で、悪いことは何一つできない男であった。彼は、毎日僅かの酒を府内の酒屋で買ひ求め、それを背負って田の浦の部落に売り歩き、少ない口銭で糊口をしのいでいた。常に山王権現に詣でて商売繁盛を祈っていた。

暖かいある日、いつものように酒を担って海辺道を通って、いつものように田の浦の里の入口で岩に腰掛けて煙草入れと火打石を取り出して一服した。

「いつ見てもこの海辺からの景色は又格別じゃ 由布

や鶴見のお山の色、国崎の岬の出入り この景色を見るだけでも貧乏を忘れて長生きしそうじゃ」

煙草をゆらし一人つぶやいているとき、崖で「キャーキャー」と悲しそうなさるの悲鳴が聞こえた。乾通は何気なく下の海辺を眺めると、一匹の大猿が岩の間に手を差し入れている。よく見ると大蟹に手を挟まれて痛そうな顔をしている。

「よしよしわしが降りて行って助けてやろう しばらく辛抱しておれ」

崖を下りた乾通は岩をはねのけて蟹を殺し猿を助けてやった。猿は、大喜びで何度も後を振り向いて手を合わせ、大谷の方へ逃げていった。

明くる日、いつものように酒を担って田の浦に行くと、昨日助けた大猿があらわれた。猿が乾通の手を取るようになって山の方へ案内するので、猿の行くままについて行くと大谷の流れに出た。流れの横に湧き水がある。猿が手真似で、しきりにその湧き水を飲むようにすすめるた。怪訝な顔をしている乾通を見て、猿は業を煮やしたのか自分で湧き水を飲んでみせるので、乾通も飲んでみると、

なんと豊饒な美酒だった。

それからというものは、乾通は田の浦の湧き水から美酒を汲んで府内の町に売り歩いて、ついには大酒問屋になって巨万の富を積んだということである。

乾通は、享録・天文の頃には大友宗麟が神宮寺浦で南蛮貿易に立会うまでの権勢家となり、ついには、乾通が立会わない交易は品物の値段が付けられなといわれるほどの大貿易商となったということである。

天子に献じた奇瑞の白亀

亀川は、里屋・御越と改名されて今の亀川となった。

この亀川の本町筋のほどに白亀塚がある。亀川の人は亀の甲と呼んでいる。此処は大昔は海の潮のさす入江であつた。

承和十五年の六月、この入江の岩根から雌雄二頭の白亀があらわれた。里人はこれは国になにか良いことのある瑞祥であるといってこれをつらえ、重平というものがこれを捧げて都に上り仁明天皇に献上した。

朝廷では、白亀は神亀であり、神亀の出現は天下の吉

兆であるといへん喜んで、年号を嘉祥と改元した。

やがて、重平は、天皇の命令を受けて雄白亀を神亀彦命、雌白亀を神亀姫命と崇め奉り、二頭の白亀を元の入江に放した。

それからこの村は亀の甲村と名付けられたが、のちに亀川村と改められた。

白亀伝説は大分郡の寒川にもある。それは、寒川の上で白亀を一匹捕らえて朝廷に献上したら、勅があつて嘉祥と改元したというのである。

古来亀は喜瑞であると大切にされ、朝廷や神社では重大なことが起こると占部（ウラベ）に命じて、亀卜（もぐ）という亀の甲を焼いて、亀裂の数によって占いを行なっていた。亀川の竈門神社にも亀卜殿があつたが今はない。

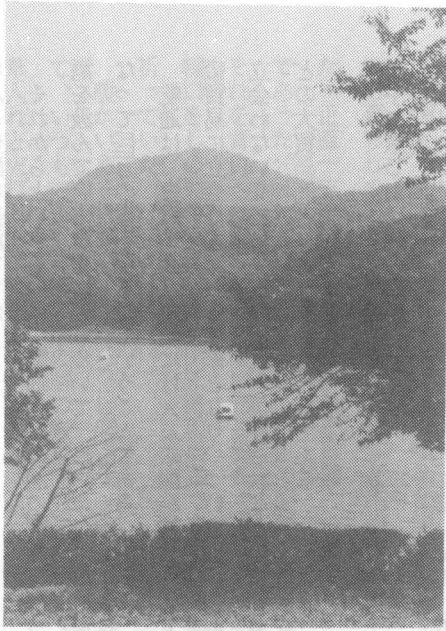
雌雄の白亀を祀った白亀塚には老松が二本残っていたが、一本は台風で倒れてしまった。

牝鹿の愛に癡心した狩人

標高七二八メートルの小鹿山が志高湖畔の東にそびえている。

昔、由布郷に狩りをその業としていた若者があった。これまで射止めた獣は、猪、鹿、兎など数千頭にもものぼったであらう。

あるとき、弓矢をもって志高湖の畔で待ちかまえてみると、一頭の牝鹿が東無田の草叢からあらわれて湖の水を飲みにやってきた。若者は一矢で射止めたが、鹿は東の山の尾根に逃げ山の頂上近くで倒れた。追いついた若い狩人は、傷ついた母鹿がいま生まれた子鹿の血糊を舐



志高湖と小鹿山

めている光景を見た。母鹿は自分の痛手も忘れたかのようになり、苦しい息遣いなかで悲鳴をあげつつ子鹿の体をなめこと切れてしまった。

この有様を見た若者は、南無頓生菩提の心をおこして弓矢をうち捨てて我が家へ帰った。それから、毎日仏壇に灯明を捧げて念仏三昧、懺悔の生活を送って一切の殺生道を離れて母鹿の冥福を祈り続けた。

それから、自分の射殺した鹿の皮を剥ぎ、兜巾とし、衣に仕立てて身につけ、皮の裏には千兜陀羅尼の経文を書き綴り仏門に帰依して故郷を旅立ち、諸国を遍歴して鹿の冥福と衆生再度を念じつつ、京都に上り修業を積んだ。やがて京の寺々を廻り佛者の道をきわめ徳望の高僧となった。寛元二年の末であった。

京の町では皮の兜巾をつけ、皮の衣をつけた僧侶が評判になった。一条天皇もこの奇異な姿の僧を革聖人と崇めて、御堂を建立されて御下賜になり勅願所定められた。革聖人も、子鹿を思う母鹿の供養のためにこの御堂を小鹿山行願寺と名付け、本尊に観音大悲像を安置したのである。京都の人はこの御堂を革堂（コウドウ）と呼んで

いる。

現在でも京都で名高い一条革堂という寺は小鹿山行願寺のことで、花山法皇も西国巡礼第十九番の霊場と定められたのである。

このことがあって以来志高湖畔の東峰を小鹿山と呼びならわしてきた。命名は行円聖人（革堂聖人）であるといわれる。

御岳権現の山伏が調伏した狐の群

鶴見山鎮護の神 火男火売神社の奉行は比叡山延暦寺の僧徒山伏が仕えていたが、延暦寺の祠堂奉納などを信徒から集めていた。御岳権現の僧坊は昼夜の境なしに法燈はかがやき読経の声は鶴見全山にこだましていた。

それは足利時代のことであった。或る年、比叡の山伏が祠堂奉納金集めのため豊後に来て、別府の朱雀院阿弥陀寺（朝見長松寺）を宿坊としていた。山伏は由布院地方へ勧進に行くため朝見の庄内道から枝郷へ向けていったが、一月たっても二月たっても戻ってこないのが、阿弥陀寺では不思議なことだと心配して、御岳権現の山伏

に事情を話して助力を求め、猪の瀬戸一帯を搜索することになった。法螺貝を吹き六根清浄を唱えて手分けをして探すと、猪の瀬戸の山麓の岩石累々たる山陰で大石に押し潰されて死んでいた。

大勢で遺体を朱雀院阿弥陀寺に持ち帰って、山伏修験者一同が大祈祷を始めて、天台の法力をもって死霊を呼び起して死因を尋ねて見ると、死霊は、

「猪の瀬戸を通るとき、山の中腹に狐が一匹気持ちよげに昼寝をしていた。この付近は狩人が通る所であるので、狩人の手にかかっては可哀相なので逃がしてやるつもりで、法螺貝を吹いたら狐は驚いて飛び起き、一目散に鶴見の裏山に逃げ込んでしまった。」

これは善いことをしたと喜んでいると、暫らくするうち、山上から大石小石が雨霰のように落ちてきたので、山上を見ると数十匹の狐が石を転がし落としていた。防ぐ術もなく、とうとう大石に押し潰されてしまったのじゃ、後の旅人の道中安全のために此奴等を退治してもらいたい。」

死霊の話を聞いて、御岳権現の山伏をはじめとし各院の

山伏が集まり猪の瀬戸の狐調伏の護摩を焚き夜を撤して大法会を執行した。

ところが、明るく朝、朝見川や朝見の田の中に幾百となく夥しい狐が首を突き込んで死んでいた。御岳権現の山伏の法力は恐ろしいもので、その後この道を通って由布院へ行き来する旅人は、狐の害を受けることがなくなつたといわれる。

炭焼小屋を巻いた大蛇

由布山と鶴見山にかこまれた広大な猪の瀬戸湿原の北にそびえる青梅台（オーメンデー）という美しいスロープの山がある。北側は太古の静けさを保つ原始林で覆われている。この原始林に大蛇の伝説が伝えられている。

昔、この青梅台の原始林に目を付けた山師が、
「これは美しい山並みじゃ、この木を炭に焼いて売
り出せば大儲けになる。人の気付かぬうちに人夫を入れよう」

やがて人夫たちは、炭焼き小屋を立てて、東側から順々に木を伐倒して来る日も来る日も炭を焼いていった。東

側を伐りつくして北側の森を残すようになったところから、毎晩のように家鳴りが始まった。炭焼きたちは夕方仕事がおわると、

「また、今夜も恐ろしい家鳴りがするんじゃないかろうか。一体何の家鳴りだろうか。毎晩こんなことがあってはわしらは恐ろしゅうて寝る夜もないわい。」

夜のとばりりが降り、丑満ツ時になり一陣の生ぬるい風が吹くとまた家鳴りが始まる。

ひとりの炭焼きが正体を見てやろうと小屋の隙間からそっと覗いてみると、胴が二斗樽ほどもあるかと思われる大蛇が小屋を三廻りも巻いているではないか。恐ろしい一夜があけた。

「ゆうべの大蛇はこの山の主であろう。段々と木を伐られて自分の住家がなくなるので、毎晩あらわれてわれらを脅かすのじゃ。こんな恐ろしい目にあつては寿命が縮まる。今日を限りに山を下りよう。」

みんな恐ろしさのあまり山を下ってしまった。

現在青梅台の北側に原始林の面影を残して、老木の密林が淋しくそびえているのがそのあとである。